

「日本永代蔵」小考

——巻頭の一節をめぐって——

谷 脇 理 史

「日本永代蔵」には、正式に序と称すべきものはないが、その巻頭の一冒頭の一節（天道もといは言いはずして……）に始まり、「是和国の風俗なり」で収まる一段落）は、同章の導入部であると同時に、「永代蔵」の序としての体裁を整えているといえるであろう。それが、野間光辰氏の云われるように、「永代蔵六巻の序説であるばかりでなく、いわば町人物すべてにわたる西鶴の根本思想ともいうべきもの」（日本古典文学大系『西鶴集・下』解説）とまで、ことごとしく評しうるかどうかは問題であるにしても、この冒頭の一節が、これまで、「永代蔵」の序にあたる部分として読まれ、その主張を一つの出発点として「永代蔵」が問題にされて来ていることは周知である。

確かにそれは、一見もつともらしく勿体らしく、西鶴の文章には珍らしいくらいの重々しさを備えて書かれている。従ってその文体

が、その場その場にふさわしい文体を縦横に駆使する西鶴によって意識的に採用された文体であり、これが、序を欠く作品の冒頭として、序の役割をもかねるよう配慮されつつ書かれた文章であるという点は簡単に承認されるであろう。その意味でこれが、これまで「永代蔵」の序と同然のものと位置づけられて読まれていることに對しては、私もまた異論をさしはさむ余地がない。

しかし、これは、その文体の勿体らしさ、重々しさを文字通りにうけ入れ、「西鶴の根本思想」の表明といった型で、すこぶるまじめにうけとめるべきものなのだろうか。確かに、どのような文章でも思想を表現していかないはずはないから、ここにも西鶴の思想はあらわれていよう。だが、その思想、あるいは、そのいささか難解な文体の中で行なわれる西鶴の主張にのみ注目してこの一節を読んだしまったとすれば、西鶴がこのような文体を用いて書いた意図をとらえそこなうことにはならないだろうか。さらには、序とも見られるこれを、まともに、というより生真面目に受け取りすぎること

が、「永代蔵」における西鶴の主張のみに注目することにつながる、「永代蔵」における西鶴の創作意図を、教訓・警告といった次元に限定するという結果をこれまで生んで来てしまっているのではなからうか。

具体的な解明を行なう前に、いささか先走った問題の提示を行なうてしまつたが、これまで、西鶴作品の中でもっとも注釈的研究の進んでいるのが「永代蔵」であるにもかかわらず、この一節において西鶴が何故このような文体を意識的に採用したかという点については、十分な言及がなされているようではない。と同時に、その文脈の把握や解釈の点に關しても、現在、対立する見解が併存していたり、納得しがたい説が行なわれていたりするようにも思われる。そこで以下私は、この一節をどう読むべきかという問題についての私見を、解釈の問題をからめつつ提示してみたい。紙数の関係もあり先学の諸説を十分に引用しつつ論証する余裕がないので、いささか独断的な解釈の提示や、結論のみを述べる部分が多くなる点等が生まれかねないが、あらかじめ御容赦たまわれれば幸である。

二

論述の都合上、まずその全文を以下に引用しておきたい。

「天道言ずして国土に恵みふかし。人は実あつて偽りおほし。

其心は本虚にして物に應じて跡なし。是善悪の中に立てずなる今の御代を、ゆたかにわたるは人の人たるがゆへに常の人にはあらず。一生一大事身を過るの業士農工商の外出家神職にかざらず、始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜べし。是二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず短くおもへば夕

におどろく。されば天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客浮世は夢、^{まぼろし} 曠といふ。時の間の煙死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立がたし。然りといへども残して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに世に有程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有。それより外はなかりき。是にましたる宝船の有べきや。見ぬ鳴の鬼の持し隠れ笠かくれ蓑も暴雨の役に立ねば、手遠きながひを捨て近道にそれ、の家職をばげむべし。福德は其身の堅固に有。朝夕油断する事なかれ。殊

更世の仁義を本として神仏をまつるべし。是和国の風俗なり。」
右の一文の中で、諸注を参照した時まず問題になるのは、「天道言ずして……」の出典に關してである。今諸注の交通整理を細かく行なうことはしないが、この出典を慎重に「未詳」とされ、守隨憲治氏「^註日本永代蔵・上」が引用する山本角太夫正本「日本蓬萊山」の一節「それ天は、ものいはずして、国土を恵み、人は弁舌清くして、心濁れり」を参考としてかかげる前田金五郎氏「新註日本永代蔵」をのぞけば、この一文の出典とされるものは二種に分れるようである。すなわち、「論語・陽貨篇」の「子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉」と、この一文を背景において書かれた王元之の「待漏院記」の冒頭部「天道不言而品物亨、歲功成者何謂也」(古文真宝後集)所収)とである。

もつとも、後者を出典と指摘する藤村作氏「訳注西鶴全集・第四巻」は「これに出たものか」と疑問を残し、他の諸注は、前者のみに注目している場合が多い。^(注1) また、大藪虎亮氏「日本永代蔵新講」のように、西鶴の無学を意識されてか、「論語」の本文をもかかげながら、それを意識して書かれた「可笑記」巻の一節を出典かと

されるものもある。と同時に、「永代蔵」注釈の集大成であるとも一応の到達点ともいえる野間氏の古典大系本の注は、頭注で「論語・陽貨篇」によるとされながらも、補注では、「典拠として、論語、陽貨篇の一節がよく引用せられるが、直接の出典は、論語以外にあったのではないかと思う」と慎重に考慮の余地を残され、前出の「日本蓬萊山」の一節を引用し、それが「永代蔵の一節と辞句を同じうし、趣意を同じうしているから」と言われている。

従って、「天道……」の部分の出典についての諸注の見解の大勢は、「論語」の一文に注目しつつもそれを出典と断定は出来ず、さればとて「直接の出典」を確認することも出来ない状態にあるといふべきかもしれない。野間氏以後の注の中でもっとも新見に富む意欲的な前田氏の注が、あえて「出典未詳」とされるのも、故なしとはしないのである。

が、この部分の出典の確定は、それ程に困難なのであろうか。この一節を書く時の西鶴の意図を考えた時、「天道言ずして……」によって当時の読者に西鶴が思いつくかばせよとした出典は、おのずと定まってくるのではなからうか。

前述のように、藤村作氏は、疑問を残されながらも、「古文真宝後集」所収の「待漏院記」冒頭の一文を出典として指摘される。昭和24年に出たこの注の遠慮がちな指摘が、その後の注でも黙殺された理由は定かでないが、後述のように、西鶴が「永代蔵」冒頭部の他の二ヶ所でも「古文真宝後集」からの引用を行なっている以上、この藤村氏の指摘は、もっと重視されてもいいのではないだろうか。

ところで西鶴は、この短い冒頭の一節で、もし藤村氏の指摘が正

しいとすれば、「古文真宝」からのみ引用を行なっていることになる。そこに西鶴の何らかの意図をよみとることは出来ないのだろうか。

諸注ともに指摘するように、前引の部分にある「其心ノ本虚にして……」の一文は、「古文真宝後集」所収の程正叔の「視箴」の冒頭部「心写本虚、応物無迹」を読み下しにした引用である。また、前引の後半部にある「されば天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客浮世は夢まぼろしといふ」という一文は、云うまでもなく、「古文真宝後集」所収の李白の「春夜宴桃李園序」の冒頭部「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢」の引用である。従って、「天道言ずして……」が、もし「待漏院記」冒頭部の引用であるとすれば、西鶴は、わずか三六九字の文章の中で、「古文真宝後集」の文章から三ヶ所、それも読者の記憶にとどまりやすい冒頭部のみを引用していることになる訳である。

私は、ここに、何か意図的なもの、意識的なものを感じとる。単に偶然の重なりによって「古文真宝後集」のみから引用されたのではなく、西鶴にとっては、「古文真宝」からの引用である必要、そしてそれを読者に感じとらせる必要があったのではないか、という疑問がここに生まれてくるのである。

もちろん、「古文真宝」が、「室町時代以後しばしば板行せられ、ことに江戸時代には初学の詩文を学ばんとする者の必読の書として、広く行われていた」（古典大系、補注三）ものであることは周知の事実だから、それが読者にとって馴染みの深いものである以上、西鶴が読者と共通の知識を引用として生かし、作品の世界への

導入をはかるうとして、見ることもできよう。また、たまたま本文の主旨を生かす上で有効な言辭が、「古文真宝」の中にあつたにすぎないということもできよう。あるいは、学識に富んでいるとは思へぬ西鶴が漢籍の引用などを行なおうとすれば、「初学の詩文を学ばんとする者の必読の書」たる「古文真宝」程度がせいぜいだったのだという見方もできないことはないかもしれない。

しかし、短い文章の中に集中して三ヶ所、しかも、読者たちの「必読の書」から、耳に熟しやすく記憶にとどまりやすい各文章の冒頭部を引用するといった例を、私は今、西鶴の他の作品の中に思ひ浮べることはできない。とすれば、少くとも西鶴はこの場合、読者がその出典にただちに気が付くことを予想しながら書いているとは言えるであらう。従つて、その出典に気付いた読者が、意識的に三度まで同じ本から引用をくり返す西鶴の何らかの意図を感じとつたと推定することは不可能ではあるまい。とりわけその出典は、他ならぬ「古文真宝」なのである。

「古文真宝」が「初学の詩文を学ばんとする者の必読の書」であることは、野間氏の言葉の通りである。が、それ故に、「古文真宝」には、すでに一つのイメージが付着している。というより、当時「古文真宝」は、そのポピュラリティの故に、そのイメージが拡大して、普通名詞として用いられてさえている程である。その用例は数多いが、西鶴の作品から今二例をあげておきたい。

「今爰に、難波の色町、夜見世の風景、又くらべて似たといふべき所もなし。……古文真宝なる白つきせずとも、千三百余人の姿を見るべし」〔諸艶大鑑〕八の五

「終夜の大踊余念なく詠めし時、常は古文真宝にかまへし男も鈞髭に様はかへながらそれとしられておかし」〔武道伝來記〕四の四

右の用例から明らかなように、「古文真宝」は、「まじめくさつて堅苦しい」ことのとえとして用いられている。すなわち、まじめくさつて（注）いること、もっともらしく勿体らしいこと、堅苦しいこと、といったイメージの代表として「古文真宝」という言葉が定着し、からかいの調子を帯びた言葉としてそれは用いられているのである。

従つて、「永代蔵」冒頭部の一節を読み、三ヶ所にわたつて「古文真宝」が引用されていることに気がつく当時の読者は、西鶴がわざわざ「古文真宝」のみを引用することの意味を感じとるであらう。西鶴は、この一節を、文字通り「古文真宝にかまへ」て書いているのであり、西鶴の「古文真宝なる白つき」が、この文章の背後にはあるのである。それ故今ここで始めの問題にかえれば、「天道言ずして……」の出典は、おそらく「古文真宝」の「待漏院記」冒頭の一文でなければ、意味がないのである。いつもの西鶴らしくもなく、もっともらしく勿体らしく、まじめくさつて「天道……」と書き出した時の西鶴は、ここですす意識的に意図的にまさに「古文真宝」の一文と確定してよいのではないかと考えざるをえない。

ところで、西鶴が、「まじめくさつて堅苦し」く、すなわち「古文真宝にかまへ」て、この一節を書き出したのは何故なのだろうか。

前述のように、これが、序の役割をも兼ねる冒頭部であるということもあるであろう。また、これまで出版したことのない、町人の経済生活をまもととりあげた新しい素材の作品故の西鶴の気負いを、ここに見てとることもできるであろう。しかし、これが序であり、そこに気負いがあるとしても、この文章をまもとに受け取り、ここでの主張を西鶴の「根本思想」と評したりしたとすれば、我々は、「古文真宝にかまえ」で書かれた文章を「古文真宝なる顔つき」で読むことになってしまふであろう。そしてそれは云うまでもなく、「古文真宝にかまえ」た西鶴の姿勢や意図を誤認することではかなく、我々は西鶴に、「古文真宝なる顔つき」と揶揄されることになるであろう。私は、西鶴が何故「古文真宝にかまえ」て書いたかを考えるために、何故そうする必要があったのかを、まず考えてみなければならぬ。

が、その答は、簡単であるかもしれない。すなわち、それは、一見勿体らしくることとしく書かれてはこの一節における西鶴の主張が、すこぶる単純で常識的なものであることと関連するであろう。

西鶴はここで、「古文真宝にかまえ」ながら、いくつかのことを強調する。それを西鶴のレトリックをはずして、主要なものを要約すれば、

- 1 始末して金銀をためよ。
- 2 金銀は大事なものであり、それでかなわぬものはこの世に「五つ」(この点は後述)きりないから、これ以上の宝はない。
- 3 金銀を得るためには、それぞれの家業を上げむべきだ。また、

そのためには、身体壮健である必要がある。油断するな。

4 世の仁義を本として神仏をまつれ。

以上である。ただし、4は、巻一の一の話題となる水間寺での借錢の風習の咄へ導入する部分とも見られるから、西鶴のここでの主張の大意は1と3と考えてよいであろう。

が、それは、見られるように、すこぶる単純素材で常識的なものである。とりわけ、商人である読者にとっては、日常生活の中で隠居親仁にいつも云われそうな教訓にすぎないであろう。もちろん私は、単純であるが故にこれに意味がないと云いたい訳ではない。しかしこれが、当時の商人にとって共通の認識であり、まともな常識であり、反論できない教訓であるとしても、それ故に、面白味のないものであることは確実である。真実とはいってもつまらぬものなのかもしれないが、少なくとも当時の読者は、まともな常識、あるいは日常的な世界で云われ続けていることが、生のままで表現されることを、「慰み草」である西鶴の小説に求めはしないであろう。

一方、読者意識を明確に持ち、その反応を計量しつつ書くことに熟達している西鶴もまた、常識的な教訓を生な型で打ち出したとしても、読者の興をひくことが出来ないことを十二分に知っているはずである。とりわけ「永代蔵」の場合、^(注3)別稿で詳説したように、現在巻五の一と巻六の四までに収録されていると推定できる初稿をいったん破棄し、巻一と四を新たに書き下ろすという成立過程で「永代蔵」が書かれているとすれば、そして初稿の段階で仲間うちの批評なり西鶴自身のそれに対する反省なりが行なわれているとすれば、今常識的な教訓を書こうとする時の西鶴が、それを生な型で表現しようとするのはむしろ当然なのである。

が、もちろん西鶴は、ここで述べる常識的な教訓の正当性を確信

してはいるであろう。それは、同様の言辭が、型を変え趣向を変えて、「永代蔵」の随所にあらわれてくることから立証可能である。が、別稿（注4）で論じたように、初稿で行なわれる「長者教」の型を踏襲した生な教訓的言辭は、卷一―四の成稿の場合に、同じ主張を行なうにしても何らかの趣向がこらされているし、教訓の姿勢自体が明らかに後退しているのである。とは云っても私は、そのことからただちに、卷一―四で、西鶴がまったく教訓や警告を意図していないといった訳ではない。私はただそこで西鶴が、生な教訓や主張を行なうだけでは、町人の経済生活から話題を求めると推定していいのではないか、といたいだけである。

いささかまわりくどい書き方になってしまったが、西鶴は、以上のような状況の下で「古文真宝にかまえ」で「永代蔵」の冒頭部を書く必要があったのである。すなわち西鶴は、その主張が常識的なものであるが故に、その主張を行なうためには何らかの趣向をかまえる必要があり、それを行なわなければ、読者の興をひくことができないのである。逆にいえば、「古文真宝にかまえて」西鶴が書いているからこそ、この冒頭の一節は、読者の興をひきうるのである。いわばここでの西鶴の腕の見せ所は、その主張の内容にあるのではなく、その表現の仕方にあるのである。

以上によって明らかかなように、西鶴はここで、すこぶる常識的な主張を、「まじめくさって堅苦しく」書いている。とすれば、「古文真宝にかまえ」たこの書き方は、読者にどのような面白さを与えるのだろうか。あるいは西鶴は、このような表現によってどのような効果が生まれることを期待しているのだろうか。

答は明らかであろう。あまりに当り前のことをもってもらしく云う時に生まれる面白さであり、同時に、読者自身も確信する常識的教訓が、思いもかけぬ表現の方法で具体化されることから生まれるおどろきである。読者は、おそらく、その内容に対してではなく、その表現の仕方を楽しみ喝采したと見るべきであり、西鶴もそれを期待して書いたと見るべきではなからうか。

が、もちろん私は、このように結論はしても、当時の読者のすべてがこのような読み方をしていたと考えている訳ではない。西鶴が「古文真宝にかまえ」で書いていることに気付かず、と同時にその面白味に気付かず、まともにうけとるだけの読者も多かったであろう。そして、そのような読者は、「永代蔵」が流布すればする程、その数を増やしたことであろう。しかし、西鶴と知識や体験を共有する読者たちは、たとえ少数であるにしても、おそらくその表現のありようのみを楽しみつつこの一節を読み、「横手を打っ」たのではなからうか。

三

「天道……」にこだわる所から、この一節を書く西鶴の姿勢や意図にまで及んでしまったが、あえて「古文真宝にかまえ」で書かれているこの文章は、とりわけその最初の二、三行が難解である。そこでまず、その部分から問題にして行こう。

「天道……」は、前述の「天道不言而品物亨」によっている訳だが、この一文は「人は……」に対比されることになるから、ここは「天は何も言わず国土に深い恩恵を施している。（それに対して物を言う）人間は、誠実でありつつ虚偽に及ぶことも多い」の意味と

なるであらう。(今、西鶴がこの「天道」という言葉をどのようなイメージでとらえていたかに問題がない訳ではないが、その点については別の機会にゆずりたい。)

従って、それに続く「其心は本虚にして物に應じて跡なし」という「古文真宝」からの引用は、「人は実あつて偽りおほい理由を説明していることになる。すなわち、これは「人の心が本来無の状態にあり、外の事物に反応するだけのものだからだ」の意となるであらう。とすれば、問題は次の「是善悪の中に立てすぐなる今の御代……」である。「すぐなる」に「過ぐる」と「直なる」がかけられていることは明らかだから、前者の意までは、前文の「其心……」を「是」がうけて、人の心が「本虚にして物に應じて跡なき故に、人が「善悪の中に立て」生きることになる所以の説明となる。が、「善悪の中に立て」人が生きる「直なる(政道正しき)御代」とは、矛盾した云い方である。何故人は、「直なる御代」に、「物に應じ」ながら「実あつて偽りおほく」、「善悪の中に立て」生きなければならないのだろうか。「直なる御代」なら、偽りも悪も正されるはずなのではないか。人は実と善との中で、「物に應じて」生きうるはずなのではないか。

もちろん「直なる今の御代」という言い方は、西鶴小説の巻頭や巻末に多出する太平を寿ぐ言辭にすぎないから、さ程こだわってあげ足とりをする必要はないのかもしれない。単に掛詞によって文章を展開しているにすぎないのかもしれない。が、それでは、その「すぐなる今の御代を、ゆたかにわたるは人の人たるがゆへに常の人にはあらず」と続く点はどうなるのか。西鶴は、「常の人」は「すぐなる今の御代」を「ゆたかにわた」れず、それが出来るのは

「人の人たる」人だけだといっているのである。

ところでここで「人の人たるがゆへ」と書く時の西鶴が、どのような人か考えていると見るべきかは問題である。「人の人たる」人が、「人の中人」「すぐれた人」の意であることは諸注の解するごとくである。が、「今の御代をゆたかにわたる」その人とは、具体的には誰なのか。

私は、「人の人たる」人の注解には、この冒頭の一節と同時期に書いたと思われる巻六の五の次の一文を引けば十分だと考える。すなわち、「一切の人間目有鼻あり手あしをはらず生れ付て、貴人高人よろづの芸者は各別、常の町人金銀の有徳ゆへ世上に名をしらるゝ事……」という一文である。西鶴はここで、「常の町人」と「貴人高人よろづの芸者」との間に明確な一線を引き、「常の町人」のみを対象に自らの主張を述べている。そして、冒頭部が対象とする読者もまた「常の町人」「常の人」である。それ故、西鶴が別格とし、「今の御代をゆたかにわた」れる人とは、具体的には西鶴が問題にする必要のない「貴人高人よろづの芸者」を指していると考えられるのである。

やや脇道にそれたが、西鶴は、「すぐなる今の御代を」「常の人」が「ゆたかにわた」れぬという。「常の人」は、「善悪の中に立て」「実あつて偽りおほき人間の世界を、「物に應じて」生きているのだという。とすれば、「すぐなる今の御代」とは「常の人」に比べて何であるのか。「常の人」である西鶴、そして当時の読者たちがこのように生きているという認識がここに語られている以上、「すぐなる今の御代」は、少くとも「常の人」の味方ではありえない。「すぐなる今の御代」という言葉に、私は、西鶴のささやかなアイ

ロニイを感得せざるをえないのである。

ともあれ、西鶴は「是……」の一文までで、「常の人」は「すぐなる今の御代」を「ゆたかにわたる」ことが出来ず、「実あつて偽りおほい人間世界を「善悪の中に立て」「物に応じて」生きていく、という認識を、「古文真宝にかまえて」語っている。ここに、今の世は「常の人である我々にはどうも」といった、西鶴の苦笑を読みとるとすれば、それは私の深読みということになるのだろうか。

西鶴は、以下、「常の人」はそのような「すぐなる今の御代」にどう生きればいかを説く。すなわち、「常の人」にとつての「一生一大事」は「身を過るの業」という訳である。そして、この「身を過るの業」も二重の意味を持って以下に続いていると考えられる。つまり、「この世を生きたること」の意と「職業・商売」の意である。従つて、「一生……」以下の一文は、「常の人にとつて」一生の一大事はこの世を生きて行くことなのだから、その職業が士農工商であればもとより、(神仏をまつる)僧・神官であればなおさら、始末大明神のお告げに従つて金銀をためねばならぬ」という意味とならう。ここにはなお、「常の人」の具体的イメージが「士農工商」「出家神職」を含めてとらえられている点、「士農工商」を階層差としてとらえず「身を過るの業」として職能の差を中心にとらえている点、「始末大明神」の言葉を生かすべく「……の外……かぎらず」といったいささかゆがんだ文体が用いられている点、士・出家・神職をも含めて「金銀を溜べし」と云われる所に見られる西鶴のアイロニカルな視点等、注目すべき点もあるが、今、紙数の関係もあり、ここでは問題点の指摘のみにとどめておきたい。

四

「金銀を溜べし」と書いた西鶴は、次に、その金銀がいかに大事なものか、を論ずる。まず「是二親の外に命の親なり」と書き、金銀は、人の命を生み出す「二親」以外で「命の親」ともいふべきものだ、という。あまりサエた洒落とは云えないが、西鶴は、ここで「命の親」といったことから、以下、人の命と金銀とどちらが大事かという比較論を展開する。

まず「人間長くみれば……」の一文で人の命のはかなさを説き、「古文真宝」を引き、「時の間の煙死すれば……」でそれを強調し、「金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立がたし」とする。このように、はかない命を失えば、金銀の効用もないと強調した後、「然りといへども」とそれを逆転し、その現世における効用を説き、「是にまじたる宝船の有べきや」と収めて、現世における金銀の大事さに軍配をあげる訳である。

ところで、この部分ではまず、「人間……」の一文が問題となる。これが人の命のはかなさを云っていることは明らかだが、「長くみれば」を「長いと思つてみても」と解さぬかぎり、意味はとりにくい。諸注すべてそう解する中で、野間氏のみ「人間の命は長いと思えば長いともいえるが」と解しているが、人の命のはかなさを強調するこの部分の解釈としてはいかがかと思う。私はこの部分を「長いと思つて見ても明朝どうなるか解らぬし」の意にとつておきたいと思う。

が、この一文は、前田氏注が「出典あるか」とされているように、何か原拠のありそうな談議口調の文章である。西鶴は、この前

後の、命と金銀との比較論を行なう、いささか論理性に欠けるとも見られる文章を書く時、何かを意識して書いているのではないだろうか。それが、この辺の文章をややぎくしゃくさせているのではないか。

私は今、主意は逆であるが、類似した文章の展開の仕方を行なっている仮名草子「心友記」下の一節を思いうかべる。それは以下のような文章である。

「殊に、人生は権の露の如し。朝にあつて夕を知らずとやらん。その上老少不定眼前なり。今世ほど利那の住家はなし。さればこそ李太白も、天地は万物の逆、光陰は百代の過客、浮世は夢の如し。喜びをなす事幾ばくぞやといひ置けり。然りといへども、皆人、前生の業を知らず。先貪欲を抱きて、富を本とし、身を苦しみ、重罪をなす……」(引用は日本思想大系「近世色道論」による。傍点筆者)。

右の文章の展開は、「朝にあつて……」で人の命や現世のはかなさを説き、「さればこそ」としてその例証に「古文真宝」を引き、「然りといへども」とそれを逆転しつつ、富を求めて生きる今の人々を指弾する。一読明らかないように、「然りといへども」以下に主張されることは、西鶴とまったく逆である。が、文の展開の仕方、それをつなぐ言葉、「天地は……」の引用、といった具合に、「永代蔵」冒頭部の一節との類似は一読明らかであろう。

ところで、「心友記」は、おそらく西鶴の熟読した本の一つであった。とりわけ、「永代蔵」刊行の一年前の貞享四年正月には、「心友記」からの引用を行ない、内容を利用した「男色大鑑」を執筆刊行している。その引用箇所等は、日本古典文学全集「井原西鶴

集(三)」の暉陵康隆氏注等を参照していただければ明らかなので、ここではとりあげないが、西鶴が貞享三年の時点で「心友記」を読み返していることは間違いないであろう。とりわけ、そこで「心友記」の引用とも見られる部分があることや、「心友記」の「弥子瑕」の「やしか」という振仮名の誤りまでが踏襲されていることなどを考えれば、「心友記」は「男色大鑑」執筆時の西鶴にとって座右の書であったと推定することも許されるであろう。従って、西鶴は、「永代蔵」冒頭部執筆の時点(貞享四年半ばごろ)に「心友記」の右の文章を知らぬはずはなく、同じ「天地は……」を引用するとすれば、わづか二巻の「心友記」の一節を思い出さぬはずはないと考えられるのである。

さらに私は、「さればこそ」「然りといへども」にこだわる。もちろん後者は、「古文真宝後集」を訓読すれば多出する修辭であるから、「古文真宝にかまえ」た西鶴がそれをを用いるのに不思議はないが、「されば」による同文の引用、他の文章で用いることの少い「然りといへども」という言葉による逆接表現を見ると、西鶴は、「永代蔵」冒頭部の執筆の際、「心友記」の右の文を脇に見ながら書いていたのではないかとさえ推測したくなる。が、そこまでは無理としても、少くとも西鶴の頭の中に右の一文が意識されていたと推定することは許されるであろう。

と同時に、西鶴は、仮名草子をはじめとする同時代の文芸を強烈に意識しながらその作品を書いている場合が多い。そしてその場合、仮名草子類の趣向や発想を逆転したり、逆の設定を行なったりすることによって自らの新しい世界を確立するという方法をとっている。それらの点については別稿で詳述したので今くり返すことは

しないが、この「永代蔵」冒頭部の一部でもまた、右の「心友記」の文章の逆転が行なわれているといえるであろう。すなわち、「然りといへども」以下で西鶴は、「心友記」の指弾する「貪欲を抱きて、富を本と」することを、そしてそのために努力すべきことを説くのである。西鶴は、この一節を書く時、「心友記」の一文の文体を引きつぎつつ、内容をまったく逆転することをねらっているのはなからうか。そしてそれに気付いた読者が、「横手を打つ」ことを期待しているのではないか。

私は、「人間……」から「然りといへども……」前後までの、いささかすつきりしない文体が生まれた所以を、右の「心友記」の一文と関連させて考えざるをえないのである。

五

「然りといへども……」以下「是にましたる宝船の有べきや」までは、現世において金銀がいかに有効かを説いていることは明らかであり、「富を本」として生きることの意味を強調している。その主張は、すでに「長者教」以下の諸書に説かれているものと次元を同じくしている訳だが、それ故にその書き方には工夫がこらされている。「ひそかに思ふに」と読者は気を引かれ、「世に有程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事」とまで読めば、当然次に「なし」「ありがたし」等の言葉が来ることを読者は予想するであろう。が西鶴は、あえて破格の文体を用いて「天が下に五つ有」と書く。読者はおそらく途惑うと同時に「五つ」とは何かと考えるであろう。西鶴はそこで「それより外になかりき」と駄目を押す。この「五つ」とは何か、中には考えこむ読者、あれこれと数えたてる読者も

いたかもしれない。

確かにこれは、西鶴が読者に出したクイズである。金銀の大事さという読者と同じ認識、いわば常識をもっともらしく面白く書くための表現の工夫の一つとして、読者になげかけた謎であることは明らかである。はたしてこの「五つ」とは何か。

周知のように、通説は、地水火風空の五大、すなわち生命の意であるとす。が、一方、野間氏は、生老病死の四つと「町人の富裕と豪奢を嫉妬し、町人の金権を削ごうとする当時の政治的権力」(古典大系本補注)とで五つと考えておられる。また、最近の富士昭雄氏「対訳西鶴全集十二」の注も野間氏説をうけつがれ、これを「生老病死」の五つとされている。従って現在もなお、西鶴が読者にそれが何かを考えさせるために出したクイズは見事に生きていることになる訳だから、今後も新説が生まれるかもしれない。

が、私は、五大・五輪によるか、前田氏のいう「五行思想に基く五運六気説」によるか定かでないとしても、結論的には、この五つは生命のことだと考える。西鶴が、読者にあれかこれかと考えさせるための趣向としてこの文章を書いたことは確かだが、この冒頭部の文脈の流れを考えると、前述したように、「人間……」以下「……宝船の有べきや」までは、人の命と金銀とどちらが「ましたる宝」であるかの比較論である。とすれば、当時の読者は、一応あれこれ考える場合はあっても、結局は人の命のことを指して云っていることに気付くのではあるまいか。私は、この「五つ」は通説に従ってよいのではないかと考える。(なお、野間氏説の論拠についても問題があるが、私が通説に従う理由は右の点の指摘のみで十分だと考えるので、ここでは触れない)。

現世においては金銀にまじした宝はないと結論した西鶴は、以下で、命にもまさる金銀を獲得するにはどうすべきかという点を「見ぬ嶋の鬼……」以下の一節で語る。そして、宝船↓嶋↓嶋の鬼↓隠れ笠・かくれ蓑↓暴雨とつづく俳諧的なレトリックの面白さを生かして出される結論は、まず「手遠きねがひを捨て近道にそれくゝの家職を上げむべし」である。さらに、そのためには身体壮健である必要をとき、浮世の仁義を重んじて神仏をまつるべしと説く。いわば、「福德は……」以下は「家職を上げむべし」という総論に対し、各論の役割を果たしているがごとくである。が、この部分について私が今具体的に問題にするとすれば、すでにそれが町人社会のまともな常識にすぎない点、および、それを「見ぬ嶋の……」によるレトリカルな修辞を用いて書いた所に西鶴の腕の見せ所がある点、この常識的な教訓の内容自体には重きを置いているとは考えられない点等、すでに二の部分で触れたことをくり返すのみに終ってしまいうである。この部分をどう読むかについては、二の項を思い出していただければ幸である。

とはいえ、ここでも「世の仁義」という言葉に西鶴が込めたイメージ、神仏にまつわる話を巻頭に置いた理由、「神仏をまつるべし」とここでいう西鶴が、話の内容においてはむしろ「いのりでもくわほうはさらになきものをわかふんべつをつねにたしなめ」(長者教)の立場をとっている点等、について問題がない訳ではない。が、それらは、「永代蔵」冒頭部の一節をどう読むべきかということを中心に考えて来た本稿の末尾で簡単に触れることは不可能である。別稿を期することとした。

以上私は、「古文真宝にかまえ」で西鶴が書いたと考える「永代蔵」冒頭部を、解釈上の問題点を中心にしながら、ざっと見渡して来た。が、おそらく私は、まだまだ当時の読者にくらべれば、「永代蔵」を「古文真宝なる顔つき」で読んでいるにちがいない。あるいは、「永代蔵」のみならず、我々は、西鶴の作品を「古文真宝にかまえ」で「古文真宝なる顔つき」で読みすぎているのかもしれない。西鶴に「何の古文真宝」(置土産「三の二」と云われぬために私は、おそらく、変幻自在な西鶴の表現の姿勢や意図をより明確にとらえながら読んで行かねばならないであろう。私の以上の追求が、その主張を中心に見られがちな「永代蔵」を見直すためのささやかな問題提起となりうれば幸である。(1977・1・7)

〈注〉

- 1 日本古典文学全集「井原西鶴集②」の私の注、及びその後刊行された富士昭雄氏の「対訳西鶴全集十二」の注は「待漏院記」冒頭を引いているが、他の諸注は「論語」を引いている。
- 2 「定本西鶴全集」の野間氏注、及び岩波文庫本「武道伝来記」の前田氏注。
- 3 拙稿「西鶴小説における成稿過程の一面」(跡見学園女子大学紀要・第2号)。
- 4 拙稿「『稿日本永代蔵』における文字成立の二側面」(国文学研究・32集)。
- 5 拙稿「浮世草子成立の一側面」(日本文学・昭和51年9月号)